

—7:15PM 冬村サユキ・犬山セト

その言葉を聞いて、私は。いや、私も「それ」に気がついた。

「え、あ。違ったかな……」

「すっかり暗くなっちゃったね」

涼やかな月明かりの時間。私達は一人で帰路に着いていた。夕日が沈んでそのまま微笑み合ながら。

「そうですね」

夢のような時間だった。出来る事ならあの一瞬を永遠に留めて置きたかった。

あの時、冬村さんの笑顔に思わずやけてしまつたものの、一滴たりとも鼻血を噴かなかつた自分を褒めてあげたい。

「今日はもう無理ですが、今度この辺りの案内もしましようか?」

「本当? 嬉しいな」

それにもしても、今日一日で、それも驚くくらいに短い時間でこんなに仲良くなれるなんて。運命が私達を祝福しているとしか思えない。

このペースで進展すれば一週間後にはきっと世界が羨む公認ベストカップになつて毎日のように互いが互いに愛の囁きを「ねえ、犬山さん」「は、はい! 何でしようか?」

「あのさ、……あのね」

何となく、そんなんじやないかとは感じてる。

でも、それは私の思い過ごしかも知れない。だから、聞かないよ。

確かめないと。

「私達さ、もう友達でいいのかな?」

「え?」

私達は、まだ互いの関係を決めていなかつた。互いに、自らの位置を定め忘れていた。

それは本来ならば必要のない事。繋がりに確認なんて詮無い事。それでも、気付いた私にはそれが必要で。きっと、冬村さんにも何か似た思いがあつて。

けれど、それに触れてはいけない。今は、まだ。

「友達……じゃ、無かつたんですか?」

だから、私はそう言つた。出来る限りに真つ直ぐに、し得る限りの自然さで。

「……そつか、そうだね」

救われた想いが胸に広がる。「同じ」である事に安堵する。

聞き返された時は怖かつた。でも、今はそれ以上に嬉しくて。

「明日も一緒に帰ろうね」

そんな一言も今なら臆せずに言える。逆に言えば、今はここまでが精一杯なのだけど。

まだ互いに知らない事が多い。言えない事だらけの私達。

でも、最初は今以上に何も知らなかつた。犬山さんを怖い人かも知れないと思つていた。それが間違いだと気づく事ができた。

きっと時間が解決してくれる。これから色々な事を話して、笑つて、時には喧嘩もしたりして。

いつか、何でも話せる関係になればいい。そんな友達になれたら、とても素敵だと思つ。